

モーリシャス豆知識・小話 第18号

2018年10月
在モーリシャス日本国大使館

(1) モーリシャスのネポティズム

皆さん、モーリシャスの独立以来、この国に何人の首相が誕生したかご存じですか？これまで11回の総選挙が実施されたそうですが、歴代の首相は5人だけ。それもベランジェ現野党(MMM)党首以外の4人は2組の親子(つまりラング-ラム首相父子、ジャグナット首相父子)なのです。これをもってデモクラシーの結果だと言えるのか、政治が安定しているからと言っていいのか、等々、次の総選挙を来年(2019年)に控え、モーリシャスでも政治が熱く語られ始めているようです。

政治家の2世、3世というのはアメリカや日本でもよくある話で、ケネディ家やブッシュ大統領父子は有名だし、日本でも安倍総理、小泉元総理、麻生元総理と華麗なる政治家の家系は多いですね。ただ、モーリシャスのように同一人物が繰り返し首相になり、かつ子供に首相職を禅譲するというのは、独裁国家を除けば確かに特異なのかもしれません。

さらに有識者を中心にモーリシャス人が懸念しているのが、政府機関の様々な主要ポストでこうした“ネポティズム(縁故主義)”ではないか、と見られる人事が行われていることです。閣僚や議員の家族、友人などが、これにより地位と高給を得ていて目に余る、ということでしょう。こうした慣行がまかり通ったままだと、公平性、機会の平等というものがなくなり、やがては国の活力や経済発展をも蝕んでいく恐れがある、そのため首相の任期を制限したり、縁故主義を法で規制したり、議員のジェンダー比率を義務づけるべきではないか、といった声が上がっているようです。

とは言え、この国は他のアフリカ諸国と比べたら抜群の政治的安定性と民主主義の成熟度を誇っており、よってこうした議論もアフリカのネポティズムとはちょっと次元が違うなという感じです。議員らが国会の場で、プレスが紙面上で、人々が街頭で、こうした問題を真正面から真剣に取り上げて論争することこそ、モーリシャスの強さなのかもしれません。



(2) 一つの夢が実現しました

今年の1月、本メルマガ2018年1号で、今年目標の一つとしてモーリシャスで日本の桜の苗木を植えるぞ、という誓いを立てました。そのときは、我が国の無償資金協力でトゥル・オ・セルフに建設中の気象レーダーサイトに植樹するということを考えていましたが、当国第一号の桜植樹をつい先日、大統領府で実現できました。当日は当地在留邦人の代表の方々にもお手伝いいただき、立派なセレモニーを実施できた次第です。当館加藤大使とヴァイアプリ大統領代行がまだ小さな苗木を植え、最初の水やりを行ったときは感無量でした。



大統領府での桜植樹式典

この日を迎えるまでには予想通り、検疫等でいくつもの難題、障害が立ちはだかりましたが、それを一つ一つクリアしてきた当館職員、またお手伝いいただいた全ての関係者に感謝です。

日本と気候の違う当国できちんと根付くのか、花が咲くのかという心配はまだ消えたわけではありませんが、両国の末永い友好を願う人々の気持ちがきっと桜にも届くはずだと信じています。これから早くも6～7年後、見事に花開く瞬間を期待したいと思います。

ちなみに、植樹はこれで終わりではありませんよ。次はいよいよ予定通りトゥル・オ・セルフの番です。そこに今回と同じ、3本の苗木を植える予定です。さらにキュールピップの植物園や、できればモーリシャス大学等にも植えたいと思います。桜の育成に適した気候のところに、しかしできるだけモーリシャスの人たちが望むところに植えていきたいと思います。

今回のセレモニーに合わせ、当地での桜の植樹と、日本人にとって桜が持つ意味や花見文化を説明したパンフレットも作成しました。まだまだ余部がありますので、親戚、お友達に配りたいという方は是非大使館に取りにおいでください。